

若手ワークショップ報告

若手による次の時代のリスク評価を考えるワークショップ

-ポスト 3.11.のリスクガバナンスの失敗学- 開催報告

(独) 産業技術総合研究所 保高徹生

日本リスク研究学会による若手会員が企画するワークショップ助成事業の支援を受け、第 24 回年次大会前日の 11 月 18 日に静岡大学浜松キャンパスにおいて、一若手による公開ワークショップ（以下、WS）－『若手による次の時代のリスク評価を考えるワークショップ』を開催いたしましたので、企画者（保高徹生、小野恭子、岸本充生（以上、産総研）、永井孝志（農環研））を代表して報告させていただきます。

本 WS の副題は、今回の震災に対してリスク評価研究者があまり貢献できていないのではないかと、との企画者一同の反省から「ポスト 3.11 のリスクガバナンスの失敗学」と銘打ちました。具体的には、1) 震災後の放射性物質問題を中心としてリスクガバナンスの混乱を科学者、リスク評価、リスク管理、リスクコミュニケーションの視点から振り返ること、そして 2) 参加者の皆様とそれらの根本原因や改善策について議論する過程で、(WS として一つの解を出すというよりも) 参加者各自の中で今後の研究／実務活動に生かせるような新たな気づきが生まれるきっかけとなること、3) 若手同士で気軽に議論ができるような、ざっくばらんな形式で開催することでより深い交流が期待できること、の 3 つの目的を持ち、このような企画を開催するに至りました。

まず始めに、企画者について紹介します。企画者一同は FoRAM (Study Group on the Future of Risk Assessment and Management : <http://www.t-yasu.net/RiskWork>) という研究会のメンバーです。FoRAM は、「次の時代のリスク評価のあり方を考える」をメインテーマとし、「安全とはなにか」、「基準値再考」、「規制科学」、「リスク評価と意思決定」などサブテーマとした有志による勉強会であり、つくば市で 1 ヶ月~2 ヶ月に 1 回程度開催しています。今回の企画は、FoRAM で議論をしていた内容を、折角の機会なので普段お会いできない人に伝え、議論し、批判を頂きたい、という考えから始まりました。

参加人数は発表者含め 31 名であり、金曜日の夕方の早い時間にもかかわらず、事前に想定していた 20 名を大きく上回りました。参加者のバックグラウンドが化学物質、食品、放射線、災害、廃棄物、リスコミ、心理学や社会学など多種多様であっただけでなく、職種も研究者だけでなく自治体関係者、NPO、企業やマスコミの方など多種多様でした。また若手 WS といいつつ、年齢層も修士 1 年生から名誉会員の先生方まで幅広く多種多様なご意見を頂くことが出来ました。さらに 21 時から開かれた懇親会には 20 名の方が参加され、多くの方が初対面にもかかわらず、大学のゼミのような熱い議論を繰り広げながら意見交換を行いました。

さて、当日のプログラムは以下のように構成しました。

前半部

- | | |
|------------------|--------------|
| 1. 科学者の行動の失敗学 | 保高徹生（産総研） |
| 2. リスク評価の失敗学 | 小野恭子（産総研） |
| 3. リスク管理の失敗学 | 永井孝志（農環研） |
| 4. コミュニケーションの失敗学 | 中谷内一也（同志社大学） |

後半部

5. ディスカッションセッション

各タイトルに記載の失敗学とは、企画者の一人でありかつリスクガバナンスの専門家である（にもかかわらず家庭内のリスク管理に失敗し当日に参加できなかった）FoRAM の座長でもある岸本充生氏の発案で、御存知の通り畑村洋太郎先生の失敗学を今回のリスク関連する失敗に当てはめたものです。これは、失敗を振り返るだけの否定的なニュアンスではなく、それらの根本原因への対処法を検討することで、この失敗を糧として、新たなリスクガバナンス枠組みを創り上げていく、という（生意気な）若手の心意気の現われとお考えいただければと思いま

す。企画者3名の発表では、具体的な事例を上げつつ、失敗の内容、原因、そして改善策について、なぜなぜ分析をフル活用しつつ、緊急時に信頼を得る科学者像や平常時に対応しておくことの重要性、リスク評価（予測ツール）の使うタイミング、そしてリスク管理の混乱の原因などについて考察を行いました。

また中谷内先生からは「コミュニケーションの失敗学」というタイトルで講演をいただきました。最初から会場を笑いの渦に巻き込むトークで、若手3名の発表を吹き飛ばしつつ、一般の方におけるリスク理解の素地とどうするべきか、という話をわかりやすい事例から展開していただきました。このトークが聞けただけでも参加した甲斐があったと思われる参加者も多かったことと思われます。

また、浜松のうなぎで腹ごしらえをした後のディスカッションセッションでは、参加して頂いた地方自治体の関係者からポスト 3.11.における苦労に関してコメントを頂くところから始まり、報道関係者の視点や放射性医学の視点、地震学の視点、時には一般市民の視点から、多くのコメントと質疑が続き、ここでは書けないような面白い議論が展開され、約1時間のディスカッションは最期まで議論が途切れること無く続いていきました。議論自体は収束することはありませんでしたが、WS修了後に多くの若手の方から楽しかった、諸先輩方からリスク学会にもこのような熱意を持った若手（参加者の皆様のこと）がいることがわかり心強いなどと言っていただけたこと、懇親会に20名が参加され熱い議論が交わせたことから、当初の目的（先に述べた1）～3))は達成できたのではないかと考えております。

今回のワークショップの開催に際して、初めての経験が多く、準備も大変でしたが私自身にとっては大変良い経験となりました。2年前に『化学物質のリスク評価と意思決定のギャップを埋める』をテーマに若手ワークショップを開催した時に、企画者の一人である永井孝志氏が「自分たちはやっとスタート地点に立つことができたのだ、そしてそのkickoffとしては成功だったのだ、と感ずることができました。」と報告していますが、2年後の今回のWSでは、今後の展開・連携の基盤ができつつあるな、と感ずることが出来ました。本WSの内容を基盤としつつ、新たなリスク評価、リスクガバナンスのあり方を追求するとともに、熱意のある若手のネットワークを維持していきたいと考えております。

最後にこのようなワークショップの開催を支援していただいた日本リスク研究学会の関係者の皆様、静岡大学の前田先生をはじめとする大会実行委員会の皆様、遠方よりご参加くださった中谷内先生、参加者の皆さま、そして前日をお願いしたにも関わらず、受付、諸手配等についていろいろご対応頂いた川本朱美氏（産総研）に感謝いたします。至らぬ所もたくさんあったかと思いますが、今後恩返し（出世払い）できたらと思います。今回のような企画から始まる若手研究者のさらなる活発化、日本リスク研究学会のさらなる発展を願ってやみません。